

金剛坂式土器の系譜

～紅村弘の学説を振り返る～

● 永井宏幸

紅村弘が提唱した金剛坂式土器の系譜を検討する。まず紅村による半世紀におよぶ研究から、紅村の言説を振り返り、現状での定義を再考する。ついで、遠賀川式土器から派生したのではなく、縄文晩期土器からの系譜を主張する紅村の考え方に導かれながら、近年の新出資料に型式学的検討を加える。ところで、伊勢湾西岸以東の地域型突帯紋系土器は馬見塚式土器の無紋・条痕紋土器（増子2類）を含まない。一方、西岸域における突帯紋系土器様式の終焉と遠賀川系土器の交流の一端が金剛坂式土器を成立させた。その過程を西岸域および琵琶湖周辺を含めた環伊勢湾岸域に求め、検討した。その結果、突帯紋系土器様式と遠賀川系土器様式の折衷形として在地型遠賀川系土器、すなわち金剛坂式土器が成立したことを提示した。

はじめに

金剛坂式土器は伊勢湾周辺地域で生成した地域型遠賀川系土器である。紅村弘による半世紀にわたる研究の蓄積がある。本稿では紅村の貝殻山式と西志賀式2類に充てられ、亜流の遠賀川、赤焼遠賀川、そしてこれらのうち、新しい部分を金剛坂式土器と呼称された土器群について、その系譜を検討する。紅村の議論は金剛坂式土器のみを取り上げては完結しない。そこで、「煮沸形態係論」と「条痕顕示論」、そして縄文文化終末と弥生開始の「関係問題」へ、紅村による最近の見解（紅村2005）を素描する。その上で紅村による金剛坂式土器の研究を基軸に据え、研究史を振り返ってみたい。紅村の見解を時系列として、新知見による修正と呼称の変化を示してみたい。

特に、1970年代前半に相次いで調査成果をもたらした金剛坂遺跡をはじめとする三重県下の研究者らによる見解、これらに対する反駁はさらなる軌道修正を余儀なくされる。

新たな展開は、山中遺跡の調査報告による新出資料である（服部ほか1992）。すなわち、地域型突帯紋系土器である「天保型変容壺（佐藤1999）」から金剛坂式壺への変遷過程を提示し、具体例によって紅村の想定が繋がった（紅村1995）。この変遷過程については、さらなる新出資料が滋賀県烏丸崎遺跡などの調査により補

強でき、小竹森直子（小竹森2007・2008）や拙稿（永井2007）を含めて議論の本題とする。

近年の新出資料は三重県と滋賀県に偏り、愛知県では麻生田大橋遺跡の報告以降ほとんど知られていない。さらに増子康真による馬見塚式の定義が尾張平野より西側に適用しないことも判明しつつある。そこで、以前検討した拙稿（永井2008）とこれに対する増子の反論（増子2009）を受け、伊勢湾西岸域の変遷を再論する。西岸域と濃尾平野から三河地域が別型式とすれば、増子2類を指標とする馬見塚式の適応範囲と適応しない別型式を示さねばならない。そうすると、西岸域から琵琶湖沿岸に展開する増子1類を指標とする型式名を提示する必要性が浮上し、さらに継続する檜王式併行期についても俎上にあがる。つまり、遠賀川系土器が西岸域で出現する時期の突帯紋系土器様式最終末の型式を示す必要がある。前稿で「馬見塚式終末期新相の可能性のある土器群」が相当する。馬見塚式から檜王式に相当する西岸域の編年を整備することにより、金剛坂式土器の成立が明確になる。換言すると、紅村の意図する変遷過程を補強する結果となる。ただし、紅村の金剛坂式土器に関する評価、遠賀川集団に対する「自主協調」という評価に直結はしない。

縄文時代晩期後葉の地域型突帯紋系土器を基盤とする土器型式から遠賀川系土器様式の影響を受けて新たに派生した地域型遠賀川系土器の系譜を検討することが、本稿の目的である。そ

こでまず金剛坂式土器の成立過程について、紅村の研究を振り返り、議論の出発点としたい。

研究史

(1) 紅村弘の研究視座

「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容」は、自身の着眼点を整理し、自ら解説を加えた「紅村自叙伝」と言えよう(紅村 2005)。紅村は「縄文と弥生の関係」を論ずる場合、土器のみ俎上にあげることが多い。現在もっとも支持されている「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」を弥生時代とする佐原眞の定義(佐原 1975)は一切受け入れない。主張する定点は土器に現れた「人」の問題である。「抽象的な言葉の一般論を幾ら並べても具体的な解決にはならない」議論を紅村は無意味とする。考古資料を使い「固有名詞不在による人の示現」を説明することが必要であると紅村は主張する。つまり、縄文と弥生の「関係問題」は「遺物という品物の分類・編年・比較の研究」から「人の行動・習慣・觀念の研究」への転換だという(紅村 2003a)。「人」を議論の主眼に置く紅村の出発点は「愛知県における前期彌生式土器と終末期縄文式土器との関係(以下関係論文)」(紅村 1956)である。のちに紅村の二枚看板となる「煮沸形態関係論(以下関係論)」と「条痕顕示論(以下顕示論)」の着想も「関係論文」である。ここでは「関係論」と「顕示論」の2点を取り上げておきたい。

「関係論」について、紅村は「変化の少ない煮沸形態の型式的つながり」から、社会的な集団意識としての「人」による直接的関係を説明する。つまり、流行に流されない基層としての変化を煮沸形態に見出し、新来文化による「文化変容」の現象として捉える。直接的関係とは血縁的関係とし、新来の進出者と区別する。ここで確認しておきたいことがある。紅村の議論に示現する「人」や「血縁」は生物学的な用語ではない。「政治」にいたっては国家・民族としてだけでなく、社会集団および集団間の概念として適用できる場合もあることに留意しておかねばならない。私

はここに紅村の考古学的手法のひとつをみる。「関係論」の題材として取り上げられる「削痕遠賀川式」の担い手である「縄文晩期人」は「進出遠賀川式」集団によって「アイデンティティを喪失」したと紅村は解した。表層(紅村の言う「奢侈的」)の変化と基層(日常的な「生活用具」)の変化の時間差について、前者に「外来人の入植文化」、後者に「在地人の従属・模倣の文化変容」をそれぞれ帰属させる。つまり基層と表層に従属的關係を付し、社会的階層性を導いている。従属的關係は「顕示論」にもつながる。

「顕示論」は「バーバリズム的表現によるアイデンティティの発露」と説明する。紅村は「美麗を誇示する」遠賀川の壺に対して「粗い条痕」の条痕系の壺に「対立觀念の顕示」を見出す。「条痕系土器の条痕とは装飾でも器面調整でもなく、共同体としての象徴的意義を持つ「表現・標徴」であり、彼らのシンボルであったと解釈する(紅村 1980)」ことによって「顕示論」は着想された。さらに遠賀川の「東限論」(紅村 1979)を唱えるなか、自然的・地理的要因説などを批判し、遠賀川東漸停止の理由を「条痕系土器の表現・標徴」が社会的要因によるとし、新たな問題定義をした(紅村 1981)。

系統区分された土器の分布も実際は混成している。西部東海地方(濃尾平野)はグレー・ゾーンである。紅村は在地勢力の「対立」を条痕系土器、「従属」を削痕遠賀川、「自主路線」を金剛坂式と捉え、「遠賀川系人」の成員移動に「政治的活動を成し遂げる」ことが「考古学による新たな歴史的認識の開拓を可能とする」。

吉田富夫が説いた文化複合と動態(吉田 1941)を端緒とする紅村の学説は、2つの集団間の社会的従属關係を土器により導き出し、政治的活動と結びつけている。紅村の研究戦略は、西日本一帯に拡散した「遠賀川人」と「晩期縄文人」の政治的活動を各地域で証明し、歴史的説明することによって自説の法則を補強しているようにもみえる。一方、大陸に目を向けると「渡来人と衛氏朝鮮の成立」に「立屋敷系渡来人」との關係を重視する。直接考

古学的に証明できる材料はまだない。遠賀川の彩文技法を端緒に関連性を探るが、大陸側に材料が整っていない。土井ヶ浜人骨など形質人類学的検証もひとつの課題であろうが、まず「関係論」と「顕示論」の法則性を検証すべきであろうと私は思う。

(2) 金剛坂式土器の研究

紅村は1956年発表した論考に金剛坂式土器の枠組みを示している(紅村1956)。当初は紅村前期分類^{*}のうち第2類とした「貝殻山式」と「西志賀式」を含み、前期をとおした特徴で示し、壺について型式差を加えた。ここで注目しておきたいのは、第2類の位置付けである。貝殻山式第2類の説明は基本的な形では第1類に類似する壺と甕とし、さらに西志賀式第1類の説明に正統的な遠賀川式土器とする。つまり、第2類を正統的な遠賀川式土器に類似するとしながらも赤褐色焼成に着目し区分している。ただし、この時点では大きく2つの系統として示している。縄文式土器より弥生式中期土器へ到る系統と、遠賀川式から弥生式中期土器へ到る系統が並び存し、相互に主体性を保ちつつ関連して近接してゆき弥生式文化を形成したと結論づけていることから、第1類と第2類は遠賀川式から弥生式中期土器へ到る系統として同一系統で捉えていたと判断できる。

2年後に刊行された吉田富夫との共著では、前期第2類に初めて「垂流の遠賀川式土器」を使用している(紅村・吉田1958)。この「垂流」は「正統的」遠賀川式土器に対して使用している。30頁の注1で「貝殻山式第2類の壺は、その発生系統が明らかでないが、強いて近似例を求めれば、五貫森式から終末期Ⅱ式(樫王式)の間に現れる壺のあるものに類似する。」とし、具体的な提示はないものの、問題設定当初から在来の要素に系譜を求めている点に注目したい。25頁では「第2類の特殊な遠賀川系土器」について、この種の赤焼の遠賀川式土器が三重県方面より、他の地方へ拡がるとし、三重県域で製作された遠賀川式土器で

^{*} 紅村は遠賀川式土器を主体とする時期(前期弥生式土器)を5類に分けた。この分類は現在まで変更ない。ただし、分類の内容については加筆と修正が繰り返されている。

あることを強調している^{**}。

『東海の先史遺跡綜括編』(紅村1963)では、第5類以外を東海地方には前期弥生文化に4つの集団がみられることを明らかにした。その第4グループに三重県方面に本拠をもつらしい特殊な遠賀川式土器をもつグループを指摘する。

久永春男は二反地貝塚(朝日遺跡の一部)の調査成果をもとに、前期を3期区分した(久永1966)。このうち一番新しい時期、二反地3式の甕を提示するなかで「半割竹管で2段または3段に横線をひき、したがって横線が4条・6条となっているもの」として金剛坂式甕をとりあげている。ただし壺についての記載がない。

一宮市内の発掘調査をもとに「縄文式土器から弥生式土器へ」を発表した大参義一は、馬見塚遺跡の地点別資料、下り松遺跡、そして大口町西浦遺跡を丹念に既出資料と比較検討した(大参1972)。なかでも西浦資料は「八剣式」を訂正するものとなり、新しく型式名は付けなかったが、樫王式に比定する尾張地域の好資料であった。ただし今日的には前後型式を含む評価がある。天保型変容壺や遠賀川系壺などを含めて金剛坂式土器の成立以前の資料群として再検討すべきである。

「金剛坂式土器」の初出は『東海先史文化の諸段階本文編』である(紅村1975a)。「垂流の遠賀川式とは正統的なタイプの遠賀川式土器に対し、異質な要素をもつが、しかし基本的には遠賀川式土器とよび得るタイプの土器と言う意味」と弁明する。古い部分は貝殻山式に「並行」し、壺は部分的にみると馬見塚式の一部に著しく類似するとし、(紅村1958)で指摘した系譜問題に壺を想定した。

この新しい部分(西志賀式に「並行」する)に金剛坂式と言う型式名を(暫定的に)冠してよび、改めて金剛坂式の系譜はその源流を東海地方の晩期縄文文化のいずれかに求める

^{**} なお、第6図では尾張平野の朝日・西志賀・熱田(高蔵)の3遺跡に求心的な矢印が向けられ、2類をはじめ3から5類まで各類が流入することが示されている。その後5回変更し、遺跡分布図に型式圏を重ねて提示している(紅村1976・1983・1984・2003b・2004)。

外ないであろうと再言する。さらに濃尾平野の中央から西部地域、渥美半島方面にも注意と関連性を想定し、三重県域の一元論を保留する。この頃調査報告のあった金剛坂遺跡、中ノ庄遺跡、永井遺跡の諸報告への牽制ともいえる。

一方、これら三重県の遺跡を調査担当者が中心となって研究会が発足した。三重考古学研究会は『三重考古』創刊号（三重考古研1975）によると、1974年3月から月1回の例会が始まっている。ちょうど納所遺跡の調査中で前出の3遺跡を含めて弥生時代が例会の中心テーマであったようだ。その第12回例会は「シンポジウム—三重県における弥生文化について—」として開催された。シンポジウムの記録は創刊号の記録として掲載されている。なかでも注目しておきたいのは、金剛坂式土器^{*}の名称である。討論の記録によると、紅村の発言も含めて「亜式土器」として統一した用語で進めている。ここでの留意点は、紅村自身がシンポジウム後も含めて一切「亜式」と使用していないことである^{**}。

『東海先史文化の諸段階本文編』の補足改訂版では、「第6章弥生時代成立論の展開」として新たに章立てし、「亜流の遠賀川式土器論の発展」の項で、「赤焼遠賀川式」と仮称して議論を進めている（紅村1981）。この論考ではじめて具体的な変遷を提示した。特に馬見塚式の口縁のやや狭くなる一種の甕と垂直の口縁をもつ薄手大形の斜条痕深鉢をそれぞれ金剛坂式の壺と甕の系譜とし、型式序列を説明する。終焉については、赤焼遠賀川から櫛目式に移ると言うのは三重だけの事であるとし、「正統遠賀川式土器」主体の西志賀式から「櫛目式土器」主体の朝日式に移行する過程で「赤焼遠賀川」は関与しないと強調する。遺跡の立地については、赤焼遠賀川を主体とする「赤焼遠賀川式系集落」が小規模な集落であると指摘し、同様の傾向を「水神平式系集落」と「共通した事情」で説明するが具体的な提示はな

^{*} 当時の紅村は亜流の遠賀川式土器と呼んでいた。

^{**} 当時調査中の納所遺跡と前出の3遺跡を含め、『三重考古』第2号で伊藤久嗣が編年の位置付けと立地について三重県の研究者を代表して紅村と異なる見解を唱える。これを受けて、紅村（1981）で改めて反論を提出した経過がある。

い。

赤焼遠賀川式土器は正統の遠賀川式土器と併行して推移することを両型式によって示される人間集団は異なった系譜において成立したものと理解する。この理解の上に立ち、小規模の集落である赤焼遠賀川式系集落と上箕田・納所・中ノ庄など「まとまりのある」正統遠賀川式系集落は「双互に密接な関係」をもっていたと想定する。ただし、納所遺跡上層資料に赤焼遠賀川式土器が主体をなすと言う現象については、納所における特殊な事情として、別項において考慮すべきとし、納所の土器変遷について「特殊な事例」を強調する。

「遠賀川系文化成立の構想」では、赤褐色焼成以外の事例も認める（紅村1982）。第1図の説明文に次のように補足する。「正統でも赤焼や、赤焼の型でも必ずしも赤くない例もあるが、全体として両者の違いは明白である。」これは、納所遺跡など金剛坂式土器の編年あるいは系列（系統）的位置づけについて、「正統」から「亜流」への変遷を否定する見解を「必ずしも赤くない例」と縄文（馬見塚式）系譜の要素、あるいは金剛坂式土器の技法と紋様の特徴から「正統」とは明らかに異なると図示する。

ところで、赤褐色の焼成にこだわっていた論調になぜ「必ずしも赤くない例」も含めたのか。刊行年月日は後出であるが、中村友博の見解が影響しているかもしれない（中村1982）。中村は「第3系列—亜流の遠賀川式土器の系列」を示すにあたり、紅村との相違点を2つあげる。ひとつは伊勢地域特有ではなく、一宮市河田遺跡を例として尾張地域にも「比較的純粋な第3系列の資料」が存在する。もうひとつは黒褐色焼成で亜流の遠賀川式土器が存在する、つまり「赤褐色焼成」が必ずしも亜流の遠賀川式土器の特徴ではないと第3系列は第2類と異なる定義だとする。その後紅村は「赤焼遠賀川」、「赤焼特殊施文」など「赤褐色焼成」を積極的に特色としてあげる^{***}。中村の論考前後に、石川日出志による

^{***} その後、もう一度亜流の遠賀川式土器（第2類）の焼成について、「赤褐色が多いが黒褐色もあり、これが特徴の一つである（但し、少数例外は正統派・亜流双方にある）」と再言している（紅村2005a）。

水神平式を基軸とした土器編年（石川 1981）と設楽博己による浮線紋系土器を基軸とした土器編年が相次いで発表された。これらの論文は、東西日本列島の交錯点における広域土器編年を整備する目的で進められている。そのため、金剛坂式土器に言及した議論はない。石川は亜流の遠賀川式土器を壺CⅢ類として取り上げ、設楽は壺Y・甕Yとして広く遠賀川式土器のなかで取り上げている。両氏の議論は条痕紋系土器の成立、特に壺形土器の出現に注目している点を確認しておきたい。

1985年11月にシンポジウム〈条痕紋系土器〉文化をめぐる諸問題が愛知考古学談話会によって開催された。伊勢湾周辺を中心に東日本を含めた広域におよぶ集成が行われ、あわせて資料集などが発行された（愛知考古学談話会 1985）。シンポジウムの直前に遠賀川系土器の特集号が発行された（談話会 1985）。これらのうち、金剛坂式土器をとりあげた論考はない。ただし、尾張平野における前期遺跡の土器分析をおこなった高橋信明は、煮沸具の問題点として、尾張平野部の小地域差を言及した。「ハケ調整B型」と分類した金剛坂式甕について、正統の遠賀川式甕「ハケ調整A型」との対比で詳細な特徴を示した（高橋 1985）。高橋の指摘した2点の着眼点に注目しておこう。ひとつは口縁端部の右下がりの刻み目、もう一つは粘土紐接合法が内傾接合となる点である。前者は後に鈴木克彦によって統計的に検証される（鈴木 1990b）。

『西日本・中部日本における弥生時代成立論』では、いくつかの型式を概論する項目に「金剛坂式土器」としてあげている（紅村 1987）。2類に分類し、第1類が従来の西志賀式第2類、第2類は条痕系土器を想定する。第3類とはしていないが、正統型（津島型）をとりあげている。

第1類の壺は胴の張りだしの大きい形と、並のものとの区別があると指摘する。この視点を馬見塚式・島貫式（樫王式併行）に遡ると天保型変容壺（紅村のいう「並のもの」とこれから派生した烏丸崎型変容壺（紅村のいう「胴の張りだしの大きい形」）に相当できよう。

「弥生時代形成新論」は最初の脱稿時（1986年12月10日）に「亜流の遠賀川式土器」・「金剛坂式土器」を文中に使用していない（紅村 1988）。「進出型の遠賀川式文化」に対して「縄文晩期転換型の遠賀川式文化」の評価を示し、「主体の遠賀川式土器に混在して独自の赤焼と文様をみる地方型の遠賀川式土器」と表現した。ただし、追記（1987年12月11日）では「遠賀川系文化の末端では、金剛坂式土器という独特の遠賀川式土器を作る文化が形成され」とし、「金剛坂式土器」を使用する。

1990年に2つの論考を提出した鈴木は、凸帯文深鉢と亜流遠賀川式土器の両側面から検討した（鈴木 1990a・b）。鈴木（1990a）は凸帯文深鉢を8類に分類した。そのうち8類とした深鉢について、樫王式＝弥生時代前期中段階（鈴木IV期）に比定し、伊勢地域の突帯紋系土器は「条痕紋系土器の母体にならない馬見塚式」と評した。さらにIV期深鉢の分布について、「主要な分布範囲は、伊勢地方から近江湖北地方・美濃地方西部にかけてであり、渥美半島もこれに含まれる」と指摘した。鈴木が指摘した深鉢は突帯上の連続押圧（刻目）に二枚貝を使用する馬見塚式の指標とされてきた増子1類aであることに注意しておきたい。鈴木（1990b）は中村（1982）の第3系列「亜流の遠賀川式土器の系列」を視座に議論を進める。前出の突帯紋系土器（鈴木IV期）と第3系列の分布がほぼ重複する点から突帯紋系土器消滅直後に第3系列が出現すると想定した。ただし、鈴木が縄文的要素として列挙した貝殻押引文・押圧文、半截竹管文などの要素から具体的な変遷過程を示していない。

「平井遺跡をめぐる縄文文化の終末と弥生文化成立の諸問題」は、それまでの論調の方向転換を図る（紅村 1992）。第2類の認定と金剛坂式の編年の位置付けを変更する。金剛坂遺跡資料と西志賀・貝殻山資料（第2類・赤焼遠賀川）は「別物」で、「三重県から直接、尾張の遠賀川系にこの種類の土器が持ち込まれたという説は、再検討する必要があるらしい」とする。具体的な事例で説明がないので意図するところは不明である。しかし、もう

ひとつの金剛坂式土器が馬見塚式に接点を持つ可能性については、「伊勢か美濃で創始されるという現象があるかもしれない」と想定し、貝殻山式の空白を埋めることにつながるので、何かこの段階で新たな新知見を踏まえての言説であったのかもしれない。

山中遺跡の報告書（服部ほか1992）が刊行されたのは前出（紅村1992）の1ヶ月後である。馬見塚式前後を検討する資料としては、西浦遺跡・古沢町遺跡以来の新出資料となり、注目された。東三河では白石遺跡の報告書（贄1993）が刊行され、その中で贄元洋は「伊勢湾沿岸地域に遠賀川集団が進出して以後、早い時期に分派した最小の集団単位である」と評した。白石遺跡の前期を通じて「伊勢平野の集団」との関係が強いとし、その後半に亜流遠賀川が確認されるという。

さて、これら新出資料を紅村はどのように捉えたか。次に「利根川論争^{*}」の牽引となった紅村（1995）からみていこう。山中遺跡の新出資料を受けて、馬見塚式から金剛坂式にいたる壺の変遷を図で具体的に示した。以前、紅村（1981）では馬見塚式「並行」として阿弥陀堂式の天保型変容壺を発端に第2類の壺へと示していた。天保型変容壺の口縁部素紋突帯が多段化^{**}傾向を図示することで、金剛坂式の壺頸部直線紋の系譜が明確になった。この考え方は、滋賀県烏丸崎・小津浜の両遺跡出土の変容壺から変遷過程を考える重要なヒントとなった（永井2008）。甕については斜線条痕深鉢+環状口縁=金剛坂式類似甕を想定する。ここで注意しておきたいのは、紅村（1992）で指摘したはいづめ遺跡の合口土器棺に用いられた金剛坂式甕である^{***}。金剛坂遺跡の甕より山中遺跡→はいづめ遺跡の変遷の方が理解しやすい。つまりタテハケ甕への変遷より斜位ハケ甕の方が型式学的に優先する。

紅村（1996）による白石遺跡の評価は「津

^{*} 鈴木（1993）の小林行雄批判から始まる利根川論争は紅村（2000）で自身が命名し、その解説を紅村（2001）と（2006）で扱い、10年を超える論争を帰結させた。表面的な言葉で示せば小林行雄 VS 山内清男の代理論争である。

^{**} 紅村の言う「突凹線文」を指す。

^{***} 特に報告書第55図281に注目。

島系・金剛坂系・元屋敷系のいずれとも異なる独特の特徴を示す遠賀川型の土器（鉢）が制作されている。私はこの白石遺跡を、東三河のいずれかの縄文晩期集落が、独自の行き方により遠賀川型の土器文化に転換した直後の集落と推定している。」と贄の解釈と正反対の論を示した。その後、白石遺跡の遠賀川系土器を再検討した佐藤は遠賀川系土器の口辺部と頸部の施紋に注目し贄の評価を後押しした（佐藤2004）。条痕紋系土器の強いヨコナデによる口縁端部処理が観察できると指摘した。つまり白石遺跡の遠賀川系土器は条痕紋系土器を製作する集団が創出した折衷土器である。佐藤は白石遺跡の遠賀川系土器を用いる「小規な移住集団」を在来集団が水稻農耕文化の習得のために「招聘」したと考えた（佐藤2004）。

紅村の言説にもどろう。「利根川論争」のなかでも金剛坂式土器について付記されることが多い。紅村（2000a）は進出者の土器型式構成として第2類を説明する。西志賀貝塚上層で第1類90%を超えるのに対して5%くらい出土するとし、具体的に出土比率を提示した。ついで、縄文晩期に系譜をひくと再言し、さらに金剛坂式のなかで型式差（地域色）を認める。

紅村（2000b）では「関係論文」の解説と展開のなかで、第2類と第4類を例に第1類「進出型」との関係を示す。第2類の金剛坂式は自主独立型遠賀川系土器系文化、第4類の削痕遠賀川系土器文化は従属型遠賀川系土器と位置づけた。

紅村（2003a）は西志賀貝塚の山内清男発掘資料報告（石黒ほか2002）を受けて所見をまとめる。山中遺跡の見解と「亜流の遠賀川系土器」の特徴について触れている。いずれも後述する際に詳しく触れる。

「利根川論争」の後半は、新たな見解を示すことより総括的な言説が多い。例えば紅村（2003b）は、2類：自主協調（金剛坂式）、3類：対峙・拮抗（条痕系）、4類：従属組（削痕遠賀川式）、と対照する。紅村（2004）は第1図「遠賀川系の東端と西端の相似現象」の解説で、「相似現象」として3つの系列を示す。第

1に渡来進出と成員移動、第2に在地変容と在地従属、第3に独自変容と自主変容がある。愛知に関しては第4の対峙・対抗現象があり、九州に関しては協調・同化したとする。紅村(2005 a)は「金剛坂式」と仮称している様式の系列を「金剛坂式では壺・甕共に遠賀川土器の特徴を取り入れているが、土器の特異な文様と製作(赤褐色・黒褐色の焼成)に独自性を保持している事から、進出遠賀川文化の人々に強く影響されながらも独自性・主体性を維持し、協調と共に独自のイデオロギーを堅持しつつ新時代にアプローチし、文化変容を遂行した人々によるもの」とする。

いずれも「人」から「事」への視点に向かう言説が多い。前記したように、紅村の論説を一部分切り取って議論の俎上にあげようとする。関係論文の主張とここから派生した「連係論」、「顕示論」、そして「状況様式」にいたるまで、首尾一貫した論調と細やかな軌道修正と大胆な展開はいつも感服する。

ここ数年で三重県と滋賀県を中心に突帯紋系土器の新出資料が増加した。とくに馬見塚式終末期に比定できる資料が目ざされる。紅村の想定から示現まで、金剛坂式土器の系譜に関する言説は山中遺跡の資料でほぼ結実しているようだ。私は山中遺跡の資料群を系譜のひとつとして金剛坂式土器の成立を捉えることに否定しない。いや、むしろ多条素紋突帯の天保型変容壺(図1-1)は、烏丸崎型変容壺につながる重要な資料と評価できる。ただ、山中遺跡資料群と貝殻山式第2類のつながりに疑問を持つ。つまり型式組列が途切れているのではないか。これが本稿執筆のきっかけである。

烏丸崎型変容壺の特徴

烏丸崎型変容壺^{*}とは、滋賀県烏丸崎遺跡出土例を典型とする突帯紋系土器系列の深鉢形

^{*} 鈴木(1993)の小林行雄批判から始まる利根川論争は紅村(烏丸崎型変容壺と最初に使用したのは永井(2007))である。しかし、ここで示した具体的な特徴や変遷の指摘は小竹森(2007)が前で、私は三重県資料を含めてその後追認したに過ぎない。したがって、内容のオリジナルは小竹森(2007・2008)にある。

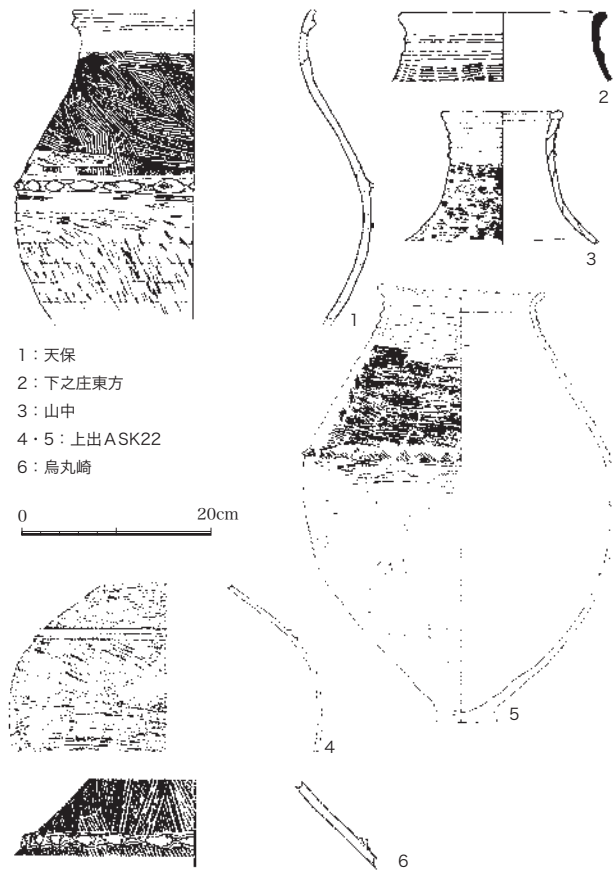


図1 天保型変容壺の口縁部素紋突帯単条から複数条へ(1:8)

変容壺を指す(図2-1)。小竹森による指摘(小竹森2007・2008)につづき、私もその変遷過程に触れている(永井2007)。ここでは小竹森の基礎作業を参考に、烏丸崎型変容壺の成立過程を再言する。その上で、金剛坂式壺形土器の2種につながる理由を提示する。

小竹森は烏丸崎出土の深鉢形変容壺に注目して、現状の整理と展望を示した。基礎作業としては、滋賀県内出土および周辺地域の深鉢形変容壺を概観し、大きく3つに分類した。すなわち口酒井式から長原式へと変遷する「畿内突帯紋系」、伊勢湾西岸を主体とする「天保型」、「その他」として1条突帯系・条痕無紋系・条痕加飾系を用意した。前二者については、細部にわたる特徴を示し、烏丸崎・小津浜・上出A資料との対比に備えた。その結果、個々の資料に変異の幅が存在することを認識した上で、さきに示した変容壺の個別要素を併せ持ちながらいずれにも該当しないことを明らかにした。そして新たな変容壺の枠組みの必

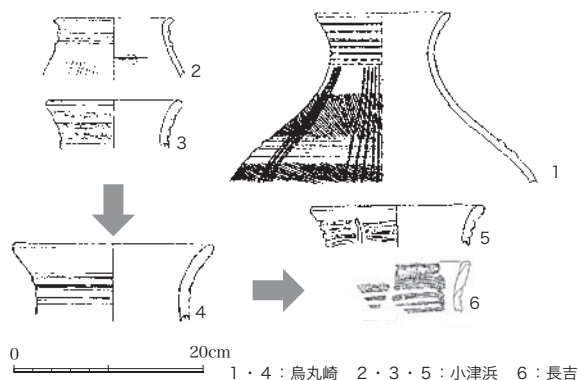


図2 烏丸崎型変容壺と素紋突帯紋から沈線紋への変遷(1:8)

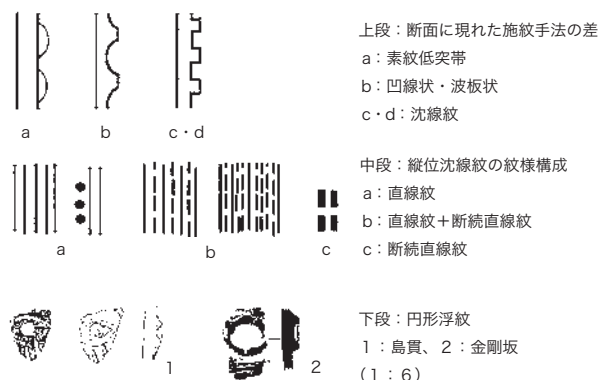


図3 烏丸崎型変容壺の施紋3種

要性に触れている。小竹森の詳細に示した要素と奥義次(2007)の指摘した2種の特徴を参考に、特徴を4つ示したい。

第1に口縁部直下の突帯から沈線への変遷を取り上げる* (図2参照)。図2-2は天保型の口縁部である。天保型の素紋突帯は当初1条であったものが、馬見塚式後半併行期に複数条へとなる。上出A資料(図1-5)は口縁直下に素紋突帯が4条あり、頸胴部界に貝殻背面押圧突帯紋がめぐる。素紋突帯の複数条は新相を示す要素、一方貝殻背面押圧突帯は馬見塚式1類a(増子1985)の特徴である。したがって、本資料は馬見塚式併行期の最末資料として位置付けらる。貝殻背面押圧突帯の有無を馬見塚式併行期の指標とする私は、烏丸崎例(図1-6)は貝殻背面による押圧ではないから新しい要素と考える。

小竹森の提示した「断面に現れた施紋手法の差」の分類(図3上段)に拠れば、素紋低突帯a類→凹線状・波板状b類→沈線紋c・d類への変遷が追認できる。したがって、この変遷が重要な意味を持つ。紅村の指摘した阿弥陀堂・山中資料から金剛坂式壺へと変遷する過程(紅村1995など)が隣接する遺跡資料でようやく明らかになった。

第2に小竹森(2007)の「縦位沈線紋」あるいは奥(2007)がB類とした「沈線と短沈線の組み合わせ」について触れる(図3中段)。口縁部直下から頸胴部界を結ぶ縦位直線紋様帯で、円周4分割以上の単位で施される。破

* 小竹森(2007)「烏丸崎遺跡・小津浜遺跡・上出A遺跡出土変容壺関係モデル図」をもとに(永井2007)で作成した変遷図。

片資料でも認識できる特徴的な紋様であるが、全形が不明である。この縦位沈線紋帯は烏丸崎遺跡出土の遠賀川系壺と類似する。ただし、遠賀川系土器に断続直線紋あるいは短沈線と呼ばれる紋様は含まない。

第3に円形浮紋をあげる(図3下段)。奥はA類「変容壺の肩部に施されるボタン状突起ないし浮紋」とB類「沈線と短沈線の組み合わせ」(小竹森の指摘した図3中段の紋様)に注目し、特にB類を金剛坂式のプロトタイプ紋様と想定した(奥2007)。さらに奥に拠ると上記2つに代表される紋様は三重県域、伊勢湾西岸に散見するという。石黒立人も指摘するように円形浮紋は岐阜県長吉遺跡からも出土しており、もう少し広範囲に広がる。現状では琵琶湖周辺の確認例はない。

第4に頸胴部界の突帯について示す。断面三角形の突帯が頸胴部界に2条めぐる。これは1条ずつ貼付けるものと2条がつながる、断面がM字状となるものがある。型式学的には前者から後者への移行が想定できるが、新旧の確認まではいたらない。なお、第3とした円形浮紋はこの突帯上につく。

金剛坂式土器の成立過程

(1) 金剛坂式土器の特徴

金剛坂式土器の特徴について、紅村の示した最新の所見**をあげておく(紅村2003a)。

** 紅村は、石黒ほか(2002)の報告を受けて、自身の西志賀貝塚調査と山内清男調査を振り返った記述である(紅村2003a)。このなかで石黒ほか(2002)の壺Dと壺Cとした金剛坂式土器について説明があり、簡潔に整理されているのでここで取り上げ、議論の発端としたい。

1. 壺も甕も基本的には遠賀川式土器の特徴を示している。
2. 焼成は赤褐色が多いが、黒褐色もあり、これが特徴の一つである。
3. 壺には口縁内面や頸・腹部に「突凹文」（太い研磨凹線紋）と幅広圧痕突帯とか半裁竹管文等があり、正統派にはこれ等の文様は無い。
4. 甕は、口縁は強く屈曲して開き、その断面が厚く膨らみを持つもので、甕としての腹部の張り出しは殆ど無いか、或いは微弱である。刷毛目は細く斜めである。
5. 「亜流」のこれらの土器は、現物を見ると誰もが「なるほど」と納得して貰える程に特徴的である。
6. 2類に属する「蓋」が無い事は不思議である。
7. 三重県にはこの亜流の類を主体とする遺跡が分布し、特に津市より南に多い。この種類の遠賀川式土器文化を創った人々の本体が三重県地域に関係を持つ事を伺わせる。

私は以前、朝日遺跡の遠賀川系土器を整理する中で、貝殻山A類と貝殻山B類に分けて説明した（永井2000）。そのうち貝殻山B類が本稿の金剛坂式土器である。前記した紅村（2003a）を受けて、改めて特徴を整理しておく。

第1に、施紋具は半裁竹管状工具（平行沈線）を多用する。壺・甕を通じて共通する施紋具である。西志賀式あるいは貝殻山式のなかにも半裁竹管状工具を使用するところがあるが、頻度は低い。頸部・胴部などに多用する沈線紋は1条ずつ施すのに対して、金剛坂式は2条1単位あるいは竹管状の背、丸い部分を利用して太描沈線で施す。

第2に、遠賀川系土器の紋様を基本とし、東日本縄文晩期の精製土器群に多用される工字紋系統の紋様を取り入れた独自の紋様構成をなす。例えば、胴部の沈線紋帯や壺の口縁部に施す沈線帯は、全周しない工字紋を意識した施紋となる。貼付突帯紋上の刻み目は、指を利用した押圧手法を多用する。伊勢湾周辺の遠賀川系土器の地域色であるが、馬見塚式の押圧手法に系譜をもつ、押圧のピッチが長く、あたかも工字紋系統のレンズ状紋を意

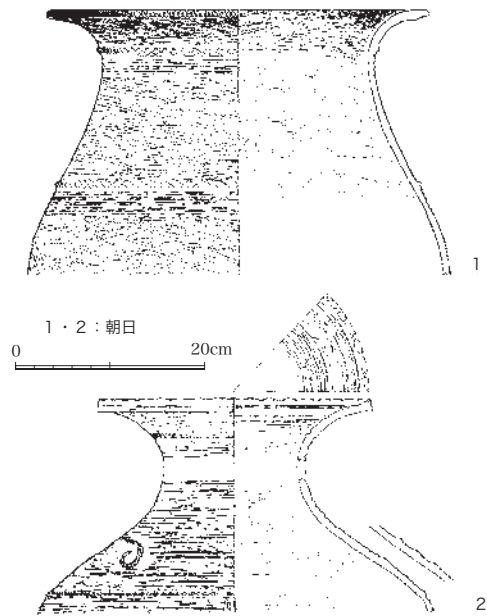


図4 金剛坂式壺形土器の二者（1：8）

識したようにも見て取れる。さらに、烏丸崎型変容壺の特徴としてあげた円形浮紋は、胴部紋様に採用されることに注目しておきたい。したがって、紋様の構成要素のいくつかは突帯紋系変容壺に系譜をもつと言えよう。

第3に器種構成は、壺と甕を中心に鉢が少量伴う。蓋と高杯がない。壺は中小型品より大型品が多い。これは突帯紋系の変容壺に系譜をもつ壺であることに由来すると考えられる。広口壺のなかに口縁部周辺に焼成前穿孔をもつ例がある。遠隔地で出土する例に多い。例えば神奈川県平沢同明遺跡、和歌山県堅田遺跡がある。

第4に焼成は、器壁が薄く比較的堅く焼き締まっている。色調は赤褐色が多く、灰褐色から褐色系の色調は少ない。かつて中村（1982）が指摘した黒褐色焼成の資料はその後類例が増加しない。赤褐色焼成を指向する程度で捉えておこう。

第5に、1から4の特徴を合わせもつ土器に共通する胎土が認められる。金剛坂式土器は雲母が多くに含まれている。ちょうど近畿地方で知られる生駒西南麓産の胎土、チョコレート色の角閃石が多量に含まれ、一見にして識別できるような特徴がある。

最後に、雲母を含まない、赤褐色焼成では



図5 馬見塚式終末期新相に比定される
伊勢湾西岸と琵琶湖周辺資料の類似例(1:8)

ない、この2つ以外は上記特徴を有する土器もある。紅村は尾張西北部一宮市周辺の資料に留意する。おそらく伊勢湾西岸の北部から中部、尾張平野西南部も含んで想定した方がよい。

以上、大きく5つの特徴を示した。再三にわたって議論される焼成と胎土の問題は、「一見して識別できるもの」を含むことが、逆に解決できない原因となっているようだ。要するに土器焼成坑の発見および焼成方法と製作地の特定が確定されないのであれば、第1から3の特徴で大きく括り、さらに第4と5の特徴で絞り込んで捉える。つまり前者を広義、後者を狭義の金剛坂式土器の特徴としたい。

(2) 金剛坂式土器の成立過程

次に系譜の問題を再度整理して、金剛坂式土器の成立過程を考える。金剛坂式土器は突帯紋系土器様式の在来型式である馬見塚式および長原式に比定される時期に生成した深鉢変容壺を基軸に成立する。天保型変容壺と天

保型変容壺を基盤に遠賀川系土器の影響を受けて派生した烏丸崎型変容壺、この両者を系譜に持つ壺形土器が金剛坂式土器の成立基盤である。そしてこれら二者の深鉢変容壺を系譜に持つことを裏付ける類例として金剛坂式壺の2例を示しておきたい。ひとつは、天保型に由来する太頸で胴部が樽形の壺(図4-1)、もうひとつは烏丸崎型に由来する細頸で胴部が扁平の壺(図4-2)である。

ところで、伊勢湾周辺の土器型式は、突帯紋系土器様式終末期に馬見塚式が設定されていた。近年の調査事例の増加により、増子(1985)の指標であった突帯上に貝殻背面押圧を施す一群の土器、1類aが尾張平野より西側である伊勢湾西岸と琵琶湖周辺に主体となって分布することがわかってきた。型式設定者である増子自身も、馬見塚式の主体は2類、突帯を持たない土器群であると再言する(増子2009)。一方私は増子1類aを馬見塚式の指標とした場合、尾張平野の馬見塚式細分を保留した。理由は尾張平野の1類aを用いた変遷過程を捉えるには資料的制約が大きいからである。換言すると1類aは客体的存在であるために型式変遷が追えないからである。

そこで、議論を再び突帯を持つ土器群、増子1類にもどして伊勢湾西岸および琵琶湖周辺におよぶ突帯紋系土器様式の在来型式を再確認しておきたい。増子2類は伊勢湾西岸および琵琶湖周辺に分布しないことである。境界線は美濃西部の木曾三川付近である。遺跡で示すと1類のみで構成する桑名市志知南浦遺跡、1類主体で2類の条痕調整深鉢を含む海津市羽沢貝塚となる。時期比定を示すと、伊勢湾西岸域の山田(2006)伊勢Ⅲ期および中村(2008)凸帯文系土器様式第4期にほぼ相当する。なお、中村の示した第5期は一部従来の馬見塚式に該当する。一方山田(2006)のⅢ期はaとbに細分している。Ⅲb期の一部は従来の馬見塚式から外れる。つまり新相を含む。このことはすでに永井(2007)で指摘した。伊勢湾西岸の代表的な資料群で示せば、蛇亀橋→野々田→筋違→宮山と変遷する。

宮山の段階前後に相当する、以前馬見塚式終末期新相と位置づけた土器群がある(永井

2008)。檜王式土器とは明らかに異なる条痕を有する土器群で、突帯紋系土器に系譜を示唆した。器種構成は、口縁部直下に素紋の低位突帯がめぐる深鉢、増子1類aを系譜にもつ頸胴部界の押圧突帯紋は欠落するものの器形を継承する深鉢、そして烏丸崎型変容壺がこれら深鉢に加わるであろう。

琵琶湖周辺では、ユビ押圧の2条突帯に縦方向の条線が施した松原型深鉢が馬見塚式終末期に相当する時期と考えている。松原内湖では北陸系と思われる変容壺、さらにこれに伴う条痕紋系土器が共存している。松原型深鉢はいまだ類例が少なく、時期比定の資料としては確定的ではない。しかし、2条突帯深鉢のひとつの変遷過程を示す材料として有効であると思う。柴原南の土器棺資料は、三重県中谷例と類似する資料である(図5)。伊勢湾西岸域と琵琶湖周辺で直接対比できる資料が増えつつある。金剛坂式土器との間を埋める資料群が充実すれば、変容壺以外の器種からも追検証できる。

おわりに

このように見ていくと、増子1類に含まれる天保型と烏丸崎型の変容壺が生成した基盤は、伊勢湾西岸から琵琶湖周辺にあると指摘できる。そしてこれら変容壺の諸要素が金剛坂式土器に継承されることから、伊勢湾周辺のうち西岸域および琵琶湖周辺も含めて金剛坂式土器の成立過程を検証していく必要がある。

本稿において議論が中途半端になってしまった馬見塚式に比定される未命名型式の存在は、永井(2007)からの課題である。増子(2009)によって指摘された馬見塚式土器の枠組みから外れる増子1類が主体となる地域の検証は未だ確認がない。それは増子2類が美濃西部を境に以西に分布しないことと連関する。馬見塚式の後続型式の檜王式は、美濃西部から尾張地域の実態は極めて不明瞭である。もちろん貝殻山式や近年設定された三ツ井式(石黒ほか2007)が主体となる地域だけに、条痕紋系土器様式の檜王式は客体的存在である。

豊川流域を中心とした東三河地域は麻生田大橋遺跡の調査によって比較的明らかになったが、矢作川流域の西三河地域はいまだ資料が整わない。今後の資料増加を待ちたい。ただし、遠賀川系土器と条痕紋系土器の対時関係は紅村の半世紀にわたる研究成果を踏まえて議論をすべきである。特に「物から人へ」そして事への議論展開は学ぶべきことが多い。

本稿は金剛坂式土器の再提唱にむけて課題の抽出を主眼に進めた。もちろん今後の課題は山積している。金剛坂式土器の特徴は提示したが、具体的な変遷や分布など、基礎的な作業を示していない。成立過程について、いくつか指摘してきたが、終焉については全く触れていない。稲沢市須ヶ谷遺跡の報告で石黒が前期末葉から中期にかけて粗製土器の視点から甕の分析を行っている。そこで金剛坂式甕の終焉から朝日形甕への移行過程を示している(石黒2008)。そしてもうひとつ、琵琶湖周辺の金剛坂式に共存する地域型遠賀川系土器の存在(小竹森2008)と検証。伊庭功による小津浜周辺で抽出可能な条痕紋系土器の位置付けも伊勢湾東岸を中心とする条痕紋系土器と比較検討していく必要がある。小竹森が気に留めた「深い条線を残すハケ状工具によって器面全面の調整及び施文を行う甕形土器」は、まさに石黒が「ハケメ紋系土器」と呼んだ祖形にあたる(小竹森2008)。

伊勢湾周辺、特に愛知県では紅村が異系統の土器群を系統整理して共存関係を明らかにした。視覚的に認識しやすい点を差し引いても、必ずしも他地域で同様の研究が進展しているとは思えない。せめて条痕紋系土器のおよぶ範囲において視点を変えてみてもよいと私は思う。まだまだ残した課題は多い。

図版出典一覧

- 図1-1 田村陽一1991『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊6-』三重県教育委員会
- 図1-2 三重県教育委員会1987『下之庄東方遺跡(高畑地区)』三重県教育委員会
- 図1-3 服部信博ほか1992『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 図1-4・5 北原治ほか2001『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2上出A遺跡』滋賀県教育委員会ほか
- 図1-6 小竹森直子ほか『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書9烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』滋賀県教育委員会ほか
- 図2-1・4 同上

図2-3・3・5 伊庭功ほか2002『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6小津浜遺跡』滋賀県教育委員会ほか
 図2-6 財団法人岐阜県文化財保護センター1994『長吉遺跡・普賢寺遺跡』
 図3上・中段 小竹森直子2007「近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート」『紀要』20号、財団法人滋賀県文化財保護協会 改変して引用
 図3下段-1 伊藤裕偉2001『嶋坂Ⅲ』、三重県埋蔵文化財センター
 図3下段-2 谷本鋭次ほか1974『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会

図4 宮腰健司ほか2000『朝日遺跡Ⅵ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集)
 図5-1 中村健二ほか2002『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書29-1 柴原南遺跡・大森陣屋遺跡』滋賀県教育委員会ほか
 図5-2 森川常厚ほか2003『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

参考文献 (刊行年順)

- 吉田富夫 1941 「尾張國西志賀に於ける初期彌生式文化の複合」『古代文化』第12巻第9號、日本古代文化學會、9-27頁。
 紅村 弘 1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代學研究』第13号、古代學研究会、1-9頁。
 紅村 弘 1958 「名古屋西志賀貝塚」(文化財叢書第19号)名古屋市文化財調査保存委員会、40頁。
 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡総括編』(東海叢書第13巻)名古屋鉄道株式会社、澄田正一校閲、278頁。
 久永春男 1966 「弥生文化の発展と地域性 中部 3 東海」『日本の考古学』Ⅲ、河出書房新社、162-184頁。
 谷本鋭次 1971 「結語」『金剛坂遺跡』明和町教育委員会、18-19頁。
 谷本鋭次 1972 「結語」『中ノ庄遺跡』三重県教育委員会、17頁。
 大参義一 1972 「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』LVI 史学 19、名古屋大学文学部、159-192頁。
 伊藤 洋 1973 「補論 弥生時代前期の土器について」『永井遺跡』四日市市教育委員会、51-62頁。
 紅村 弘 1975 「第4章 弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階』私家版、69-82頁。
 伊藤久嗣ほか 1975 「シンポジウム-三重県における弥生文化について-」『三重考古』創刊号、三重考古学研究会、18-25頁。
 紅村 弘 1975 「入門講座 弥生土器 中部 東海西部1」『考古学ジャーナル』No.112、ニュー・サイエンス社 20-25、31頁。
 紅村 弘 1976 「入門講座 弥生土器 中部 東海西部4」『考古学ジャーナル』No.125、ニュー・サイエンス社、16-18頁。
 伊藤久嗣 1978 「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古』第2号、三重考古学研究会 22-32頁。
 伊藤久嗣 1980 「遺物・遺構の考察 土器について 弥生時代前期」『納所遺跡』三重県教育委員会、75-78頁。
 紅村 弘 1981 「第4章 東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版 私家版、98-113頁。
 紅村 弘 1981 「第6章 弥生時代成立論の展開」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版 私家版、123-145頁。
 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立-水神平式土器の成立過程-」『駿台史学』第52号、駿台史学会、39-72頁。
 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号、信濃史学会、87-129頁。
 中村友博 1982 「土器様式変化の一研究 伊勢湾第I様式から伊勢湾第II様式へ」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、平凡社、159-188頁。
 紅村 弘 1982 「遠賀川系文化成立の構想」『考古学研究』第29巻1号、考古学研究会、67-82頁。
 紅村 弘 1983 「遠賀川系文化の東漸」『弥生時代成立の研究』私家版、54-58頁。
 紅村 弘 1983 「東海西部」『弥生土器』I、ニュー・サイエンス社、275-314頁、補記306~309頁。
 紅村 弘 1984 「東海の先史遺跡総括編」刊行以降に於ける調査と研究の進展」『東海の先史遺跡』総括編復刻版 私家版、279-320頁。
 紅村 弘 1984 「知多半島における弥生時代の開始」『知多古文化研究』1、知多古文化研究会、49-55頁。
 高橋信明 1985 「各地の様相 尾張東北部及び南西部」『マージナル』No.5、愛知考古学談話会、1-8頁。
 紅村 弘 1986 「縄紋土器と弥生土器 中部日本」『弥生文化の研究』3、雄山閣、126-135頁。
 紅村 弘 1987 「金剛坂式土器」『西日本・中部日本における弥生時代成立論』私家版、87頁。
 紅村 弘 1988 「弥生時代形成新論」『考古学叢考』下巻(齊藤忠先生頌寿記念論文集)吉川弘文館、304-349頁。
 鈴木克彦 1990 「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相」『三重県史研究』第6号、三重県、45-78頁。
 鈴木克彦 1990 「亜流遠賀川式土器 再考」『Mie history』vol.2、三重歴史文化研究会、23-32頁。
 紅村 弘 1992 「平井遺跡をめぐる縄文文化の終末と弥生文化成立の諸問題」『平井稲荷山遺跡』小坂井町教育委員会、68-90頁。
 服部信博ほか 1992 「考察A期の遺構と遺物の変遷」『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター、72-85頁。
 費 元洋 1993 「白石遺跡の遠賀川集団」『白石遺跡』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集)豊橋市教育委員会、64-67頁。
 紅村 弘 1995 「様式・型式における状況の理論と弥生文化成立の新課題」『王朝の考古学』(大川清博士古稀記念論集)雄山閣、32-55頁。
 紅村 弘 1996 「弥生文化成立論に於ける「成員移動」と「文化変容」」『知多古文化研究』10、知多古文化研究会、71-90頁。
 佐藤由紀男 1999 『縄紋弥生移行期の土器と石器』(考古学選書)雄山閣、278頁。
 永井宏幸 1999 「弥生時代前期の諸問題-三ツ井遺跡からの検討-」『三ツ井遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集)(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、170-185頁。
 紅村 弘 2000a 「縄文と弥生関係論に於ける関西と愛知県の比較」『古代人』60名古屋考古学会、1-39頁。
 紅村 弘 2000b 「付載愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係「関係論文」の解説と展開」『古代人』60、名古屋考古学会、89-105頁。
 永井宏幸 2000 「弥生時代前期「遠賀川系土器」をめぐる諸問題~朝日遺跡I期をめぐる~」『朝日遺跡Ⅵ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集)(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、577-596頁。
 石黒立人ほか 2002 「愛知県西志賀貝塚資料」『山内清男考古資料13』(奈良文化財研究所史料第58冊)奈良文化財研究所、1-39頁。
 紅村 弘 2003a 「西志賀貝塚の山内清男発掘資料についての所見」『伊勢湾考古』17、知多古文化研究会、83-95頁。
 紅村 弘 2003b 「鈴木正博の「条痕顕示論批判」への回答」『伊勢湾考古』17、知多古文化研究会、97-120頁。
 紅村 弘 2004 「山内清男の土器型式研究に於ける問題点」『伊勢湾考古』18、知多古文化研究会、71-90頁。
 紅村 弘 2005 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(1)」『考古学ジャーナル』No.529、ニュー・サイエンス社 35-38頁。
 山田 猛 2006 「伊勢の突帯文土器」『いちのみや考古』終刊号(No.20)、一宮考古学会、83-98頁。
 小竹森直子 2007 「近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート」『紀要』20、財団法人滋賀県文化財保護協会、9-18頁。
 石黒立人 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古稀記念考古学論文集』同刊行会、129-189頁、宮腰健司と共著。
 奥 義次 2007 「三重県における突帯文期の諸相」『関西の突帯文土器』発表要旨集、関西縄文文化研究会、97-100頁。
 永井宏幸 2007 「伊勢湾周辺からみた突帯紋系土器様式の終焉」『関西の突帯文土器』発表要旨集、関西縄文文化研究会、101-110頁。
 小竹森直子 2008 「鳥丸崎遺跡・津田江湖底遺跡の総括 遺物編 弥生時代前期~中期の土器様相について」『鳥丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』(琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書9)財団法人滋賀県文化財保護協会、225-236頁。
 石黒立人 2008 「須ヶ谷遺跡の弥生土器をめぐる予察」『須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第156集)財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、109-111頁。
 中村健二 2008 「凸帯文系土器(中四国・近畿・東海地方)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション、798-805頁。
 中村健二 2008 「近畿地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、107-117頁。
 永井宏幸 2008 「東海地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、118-128頁。
 中村健二ほか 2009 『赤野井浜遺跡』第1分冊本文編1(琵琶湖(赤野井浜)補助河川環境事業に伴う発掘調査報告書)滋賀県教育委員会、458頁。
 増子康真 2009 「伊勢湾沿岸の縄文晩期末土器の研究」『縄文時代』20、縄文時代文化研究会、181-200頁。